

トマス ウェバ 英国出身の元キリスト教徒

:

明:真理の探索者が、自らの宗教としてイスラ ムを 出します。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: トマス ウェバ

日 8 Sep 2015

集日 28 Sep 2015

イスラ ム改宗者の多くがそうであるように、私の改宗 も第三者からすればシンプルなものです。ある若者が、自分の家族の宗教とは なる宗教を つけ、やがて家族にそのことを告げ、改宗に至るというものです。

しかし、人生におけるその他の物事と同じように、最も困 と思えるのは旅路の最中ではなく、目的地に到 することなのです。もちろん、イスラ ムでは至高者アッラ による定めでなければ旅は りを迎えませんが、旅路の中で色々な出来事が起きます。それでは、 在までの私の人生の物 、そして未来への希望と 望についてお したいと思います。

私は英国で生まれ、家族には 情にあふれた2人の 、1人の兄（コリン）、私の双子の 妹（リンダ）、そしてそれに く2人の妹（上のメリッサは私が幼い に死んでしまい、下は末っ娘のエミリ です）がいます。

父は反 意 を述べることのできない赤ん坊に してそうすることに反 だったため、私に洗礼の 式を受けさせませんでした。ただ、母はキリスト教を学ばせるため、私たちを日曜学校に入学させました。

そのことについてはどう けばいいのか迷ってしまいます。母にとって、私は物心がつくのがあいにく早かったようで、その 果なぜ慈 深き全能なる神が私たちの罪を赦すた

めに自らの息子を さなければならぬのか全く理解できませんでした。

神が全能であるなら、たとえどのような罪であれ、それらすべてを赦すことができなければどう考えてもおかしいのです。自らの子を すということは、慈 深き神がするよ
うなことではないはずで

の と共に、私は神について教えられてきたことを考 しないようになりました。宗教的
な祝祭日は、プレゼントの交 や休暇のための となりました。私は迷い去ってしま
が、そのことにも 付いていませんでした。 局宗教者たちは、私たちが学校で学んだ科
学のように自分たちの宗教を 明することは してできなかったのです。私にとって、彼
らは の弱い愚か者に ぎませんでした。

その も私は学校で良い成 を修め け、 もそれに喜び、すべては でした。13 の 生日を迎え
るまでは、私は宗教に 味を持つことはありませんでした。

宗教に 味を持つと言っても、 践的なキリスト教徒になったという ではありません。そ
れは して起き得ないことです。しかし、何らかの形の神に、人生で成功を めることの
できるよう、そして欲しいものが手に入るよう祈り始めました。それはどちらかと言
うと、自分の力ではどうすることもできないことに しての信 のようなものでした。

学年が上がってくると、私は 々な宗教について学び始めました。神というものが存在
せず、自己を高めることがすべてである 教は良い宗教に えましたが、それは 局私がキ
リスト教で学んだことと同じでした。

私はあらゆる宗教の目的はひとつであり、それはすなわち人をより 理的にすることな
のではないかと考え始めました。私は自分をより良い人 へ高めようと み けましたが、
何かが不足している感が否めませんでした。

高校を卒 するおよそ1年前、兄がキリスト教の信仰を新たにしました。ただし、彼は私
の改宗を 拗に迫ってきたため、それは私にとってはいくぶん辛い でした。私は依然と
して、イエス（神の慈悲と祝福あれ）が私たちの罪を赦すために されたということ

受け入れることができませんでした。

それゆえ、家族や友人たちとのさらなる を避けるため、また周 から わり者という烙印を押されること（私自身、兄へのそうした冷酷な仕打ちに加わったことを非常に 悔しています）を避けるため、宗教に 斜する兆候を しました。

私の魂の探求は、その のおよそ1年 に渡り自ら抑制され、包み されました。そして米国で、世界 易センタ ビルへのテロ攻 が 生しました。そのことを最初に いたとき、そんなことが起きることなどあり得ないと思っていましたが、 にそれは起きたのです。

それについての 道は え なく行われましたが、私 人とは わりのないことだったので、ただに私はいつもの生活に りました。イスラ ムのテロリストやムスリムたちへの 行 に する 道、そしてアフガニスタン、 にイラクへの侵略が行われてから、私は自国と米国の政府について疑 を抱くようになりました。このことは、私が最 的にイスラ ムの真 を い出すことにつながりました。

私は に、ムスリムたちが憎 を抱いたり 人を行うテロリストであることが信じられませんでした。それはただただ奇怪に映りました。それゆえ私はそれらを したのですが、ひょっとするとそのとき、私の心が初めて本当にイスラ ム宗教について学んでみよう という になったのかも知れません。

それは大学予 校の1年目に、ムスリムの友人ができるまで起きませんでした。当初は彼女があまりにも寡 だったため、自分の友人になるとは思っても ませんでした。その友人を通して、ムスリムたちは狂人や 人などではなく、普通の人 であるという明白な を つかんだのです。

やがて、私は周りに もいないときにインタ ネットでイスラ ムに して 索し始めました。その はまだ宗教、特にイスラ ムについて考察していることを人に知られたくはなかったのです。私は自分が目にしていることを信じ始めましたが、まだ少し混乱しており、私の理解も追いついていませんでした。

やがて夏休みになると、ほぼイスラムが真であると思うようになっていました。私はそれが真理であると信じたかったのですが、それを信することができませんでした。幼少の頃から良い成を修め、私たちの目に自分が完璧に映ることを求めてきたので、えているかもしれないという可能性が耐えられませんでした。

ムスリムの友人にはきたいことがとても山あったのですが、夏休みだったため容易に会うことができませんでした。たまにで数に渡ってしみました。改宗の助け船が欲しいということ打ち明ける勇を出すのにがかりました。

イスラムという宗教について混乱していることを明する勇をようやく振りったものの、ムスリムになりたいなどとはして言い出せませんでした。それが自分自身でも非常に恐れていた、まぐれな思いつきではないというが持てなかったからです。しかしながら、それでも彼女にそのことを打ち明けると、彼女からの反は良いものでした。

私は自分がムスリムになる心がつきましたが、そのことを公にし、より多くの知を得る勇が必要でした。兄がキリスト教徒になって以来の私自身と妹たちによる冷酷な仕打ちをえていたため、家族にはまだ打ち明けることができませんでした。私はそれと同じものか、より酷い仕打ちを受けることを恐れていました。

兄は、局は彼自身が育った境と国家の宗教にったのであり、私の合は完全に状がなります。それ以降、私の旅路は最も大きな困に直面しました。家族に知れ渡ることを怖れてにも告げられないのであれば、どのようにさらなる知を得ることができるのでしょうか。そういうこともあり、私はいをかけて、徐々に友人たちや家族に打ち明けていきました。

日をめなければいつまでもしないことが分かっていたので、私は20の誕生日にシャハダ（信仰言）をすることにめました。その直前の末にロンドンでかれていた世界平和一会に出席し、非常に有意なをりました。その末明けの月曜日に信仰言をするのだと意んでいましたが、土曜に友人の家でごすまでは、月曜にシャハダをする感がいてきませんでした。

なぜかというとその日の夜、眠りにつこうと横たわっていたとき、アザンが私の ところに いたのです。それは最も素晴らしい体 でした。翌日、私は人々がシャハ ダをしている のを目にし、月曜に自分の番が来るのを待ち焦がれました。ようやく月曜日になり、自分がシャハ ダを口にすると、非常におかしな感 にとられました。私はようやく自分が本当の自分になった がしたのです。

良い物 には起承 がつきものですが、この物 に してはまだ わりがないため、もうちょっとお待ち かなければなりません。私はまだクルア ンとハディ スを始めとして、多くの 事について学ばなければならないのですから。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2136>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。